

|||||
卒業論文要旨
|||||

野川における都市河川の再生について

青井千佳

1. 目的と方法

野川は、国分寺市恋ヶ窪に端を発し、国分寺崖線（ハケ）沿いに東南に流下して世田谷区二子橋下で多摩川に合流する、延長約20kmの中小河川である。ハケの裾から湧き出る湧水と、流域の生活排水を主な水源としている。1960年代以後、流域人口の増加等による汚濁が深刻となり、一時は多摩川最大の汚濁源とまで言われた。その後、多摩川浄化対策に基づく流域下水道の整備が進み、水質は改善傾向にあるが、一方で流量の減少という新たな問題をかかえる。

都市河川としての野川の特徴は、河川沿いに比較的自然が残されていることである。そのため、他の都市河川に比べ、野川は再生される可能性が高い、と考えられる。ここでは再生された河川を、大多数の住民がきれいだと感じる水質、豊かな水量、住民生活と関わりを持つ生きた水辺、の3つを合わせ持つ河川、とした。

本論文は、この中から水質と住民生活との関わり方の二点をとりあげ、野川再生の可能性について考察することを目的とする。また、方法として、最も水質の悪い上流域における水質調査、東京都の水質自動観視システムのデータを利用した時間変動の解析、流域住民へのアンケート調査等を行った。

2. 結果

まず水質面だが、野川の水質は確かに改善されつつあり、上流域も国分寺市の下水道整備に伴い浄化が進んでいる。しかし流量の減少は著しく、そのため冬には水質が悪化する傾向がみられる。また、中流では藻類の繁殖が著しく、夏は日中、DOが過飽和状態となることがある。

住民への意識調査の結果、住民の大部分は野川に関心と愛着を持っていることがわかった。しかしその度合には個人差があり、野川近辺に長く居住し、湧水等に詳しい、年輩の人ほど野川に愛着を持っている、という傾向がみられた。

人々の望む野川は、予想通り水辺に親しめる自然の川、というのが圧倒的であったが、実際に野川と関わりを持って生活している人は、ごく少数である。しかし野川公園等では、河川と積極的に関わりを持とうとする人がかなりおり、自然に親しめる場の重要性が確認された。

野川の再生は、流量の問題・湧水の枯渇など難しい面があり、行政の力だけで解決するのは不可能と思われる。野川が再生されるか否かは、今後の流域住民の地域運動にかかっている、と言えるのではないかと。

見沼代用水と灌漑地域の土地利用

朝川千津子

1. 研究の目的と方法

本研究は、見沼代用水の水利用の変遷と、用水によって灌漑される地域の用水利用と土地利用の変遷・特徴を明らかにすることを目的としている。灌漑地域には、下流域にある見沼田圃を選んだ。

2. 要旨

享保12年（1727）幕府は新田開発と用水の安定

確保を目的として、川口市を中心とする荒川沿岸水田地帯を灌漑していた見沼溜井を干拓し、見沼代用水を開削した。この見沼溜井跡の新田が見沼田圃である。見沼代用水は見沼の代わりの用水という意味がこめられている。

江戸時代を通して、見沼代用水は幕府の直轄用水となり大事に保護されてきた。水利においても他用水に優先して配水され、増水干ばつ時でも平